

長崎医療センターの思い出

元国立病院機構長崎医療センター薬剤科長 野間口 利夫

まずは、令和3年春の叙勲に際し「瑞宝双光章」を受賞しましたが、思いもよらぬことでした。このことは皆様よりいただきましたご指導ご支援の賜物と深く感謝いたしております。本当にありがとうございました。

昨年、12月22日、私の受賞に際して江崎宏典院長先生はじめ、病院の幹部の方々列席のもと、叙勲伝達式が長崎医療センターで行われました。院長先生はじめ皆様、大変お忙しいなか、私の栄誉を讃えていただきました。誠に有難うございました。

さらに、国立病院機構長崎医療センター 元薬剤部長 東島 彰人様並びに国立病院機構長崎医療センター 薬剤部長 三角 紳博様のお二人から国病久原会のホームページ上でも受賞の祝辞まで頂きました。この紙面をかりて厚く御礼申し上げます。

さて、医薬分業と長崎医療センターの思い出を記してみたいと存じます。

ヨーロッパの医薬分業は1241年ローマ帝国皇帝フリードリヒ2世が発令し

たことによって始まったと言われております。約 800 年近くの歴史があります。1241 年は日本で言えば鎌倉時代です。日本の医薬分業は「明治」の頃より言われていました。行政も様々な医薬分業推進のため政策を実施してきましたが遅々として進みませんでした。

1974 年(昭和 49 年)、厚生省は診療報酬の改定により処方箋料を 100 円から 500 円に引き上げ、医薬分業の進展を図ろうとしました。その結果、いくらか弾みがつきましたが、まだまだの状態でした。この年は今では「医薬分業元年」と言われております。

決定的な弾みがついたのが 1997 年に厚生省が 37 のモデル国立病院に対して完全分業(院外処方箋受取率 70%以上)を指示したことでした。それ以降、医薬分業は急速に進み 2003 年には全国の分業率は 50%を超え、2012 年には 66%に達しました。そして、今では 76%前後となって、日本の医薬分業は達成されております。先の 37 のモデル国立病院の 1 つが長崎医療センター(当時の名称 国立長崎中央病院)でした。

私は、1997 年(平成 9 年) 12 月 1 日付で長崎医療センター(当時、国立長崎中央病院)に転勤となりました。早速、寺本院長先生のところに着任のご挨拶に伺いましたが、開口一番「院外処方箋発行の旗振り役を君がやれ、そして、それと同時に服薬指導業務をやれ」との趣旨の話をされたのを今でも鮮明に覚えて

います。

当然ですが、この院外処方箋発行促進と入院患者様の薬剤師による服薬指導業務に一生懸命取り組みました。そのため院内を奔走していたのを思い出します。また院外処方箋発行には、その受け皿となる地域薬剤師会との話し合いも並行して行っていました。その結果、院外処方箋発行も服薬指導業務も一応目標は達成したつもりです。

これらの院外処方箋発行、服薬指導業務等ができたのも当然ですが、院長先生はじめ院内の各部門の皆様のご理解ご指導ご支援があったからであり、改めて御礼と感謝を申し上げます。

併せて、コロナ禍のもと、職員の皆様ご奮闘のことと存じますが、どうぞお体を大事にしてください。

以上簡単ですが思いついたことを書いてみました。拙文にて失礼いたします。今後ともどうぞよろしく願いいたします。